

ご挨拶

養護学校時代から引き継がれてきた知的障害児童生徒に対する教育は、主に機能訓練・生活指導が日々の学習の柱であり、高等部卒業時には一般の学校と同じく産業社会に適応、就職させることが優先課題でありました。教科学習の中心は、国語・算数／数学に加え作業学習を重要視したものとなっており、大きく変わらないまま今日まで踏襲されております。

昭和が閉じて、平成から令和へと社会の在り様は大きく変わりました。今日の日本では、平和の中で一定水準の豊かな暮らしが常態となっており、人の個性と多様性を尊重する段階にあります。この段階で適切な教育目標は何か一本校では知的障害がある子どもたちが目指すべき、時代に合った着地点を改めて考える必要がありました。その結果、従来の教育から脱皮を図り、知的障害者の未来に可能性を拓く新たな教育目標「21世紀の自立と社会参加」—情緒を安定させ、生活のなかで楽しみ豊かさを感じて生きていく力を育てること—を掲げ、子供たちの未来に求められる力（生きる力）を獲得するための教育課程に更新したところです。

その主たる変更点は、音楽・図工／美術・体育の3教科（「生きる実感教科」と呼ぶ）を、国語・算数／数学（「生活力育成教科」と呼ぶ）に並ぶ主要教科に位置づけ、週時程の中心に置いたことです。全国的にも珍しい取り組みであると考えますが、知的障害児童生徒にとって一般の子どもたちと同等な学びが期待できる3教科でもあり、人間性を育む基礎的資質の醸成に重心を移した教育のかたちです。

人間性の基礎的資質とは、言い方を変えれば「知性の素地」であり、これを耕す^{くわ}鋤にあたるものが音楽・美術・体育と考えます。よく耕された素地を土台にして人間としてあらゆる成長（教科的成長）が始まると考えるのです。また、人間が生まれ持った個性に対してもアプローチが期待できます。個性は各々の内に潜んでいるもので、火山に例えれば内部に潜むマグマ溜りです。これは外から見えませんが、3教科はここに働きかけることが出来ます。うごめくマグマ溜りを活発に元気づけ、大きく育てることに力を注ぎ、噴出する時を待ちます。いずれやってくる噴火は、目に見える形となって自己形成を決定づけます。この段階を経て自己肯定感と達成感を重ねる歩みが始まるのです。（更新した教育課程のイメージ参照）

特別支援学校は、そのかたちから、子供たちの多くが同校で12年間を就学することになります。本校では、この連なる12年を利点ととらえ、俯瞰的で一貫した教育理念のもと、体幹となる音・美・体3教科の確かな教育方法を作り上げることができないかと発想しました。このようにして発案されたものが今年度から始まる学校研究となりました。6年間を一区切りとして計画を立て、その初年の研究内容が公開研究会を経て本誌にまとめられました。

本年度に取り組んだ教科は図工／美術です。小学部をターゲットに図工／美術の素地づくりに集中することになりました。実施した公開授業は、子供たちの感覚が直接拓かれることを目指した活動となりました。数か月間に重ねられた教員の工夫は、いわば命の源に迫るように大地に降りていった経過と捉えることが出来ます。子供たちが地面を掘ったりかき回したり、泥水に入って跳ねまわったりする姿、土くれを手にして対話する屈託のない表情や笑顔に、改めて図工／美術の原点である素材との関係づくりを考えさせられ、さらに、教科教育の前段階である「あそび」の重要性についても思いを深めたところです。

今回の研究については成果として結ぶ内容には至っておりませんが、自由協議では、以下の3点について斬新な議論が展開できたと考えております。

1. 今までになかった授業の作り方

2. それに沿った指導案の作り方

3. 学びの過程をどのように評価できるか

本校の取り組みの難しさは、子供たちの成長の姿のどこに音・美・体3教科の教育の成果を見出すのか、明らかにすることが困難なところにあります。自由協議で提案・議論された3点については未開拓の領域でもあり、大いに期待できる研究テーマでもあります。

次年度以降の研究については、引き続き小学部に集中し、次回は体育、その次に音楽について、それぞれの素地づくりを進めていく予定です。毎年各教科の成果等については、ターゲットになっていない中学部、高等部の授業づくりにも基礎的な考え方として随時取り込みながら、授業改善を図っていくこととなります。その後は、小学部から中学部、そして高等部への接続を考案することとなります。

教育の成果は、従来から短期的な視野に収まるものではありません。本校では、新しい教育目標の実現に向けて、長期的な展望で学校研究を進めることとなります。知的障害者の将来の暮らしが明るく生き生きとしたものになることを想い、その想いの大きさから本校教職員の研鑽と成長が促され、理念がかたちとなることを心から願うところです。

関係各位におかれましては、本校の教育の趣旨をご理解いただき、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

茨城大学教育学部附属特別支援学校長 島剛

